

# 工芸的表現による矛盾の解放と対比の両立

Liberation and coexistence of antinomy through craft expression

林 麻依子

HAYASHI, Maiko



中空中で虚ろな造形の、表層だけを釉薬で覆ってしまうような「陶芸」の方法に、私は真実を見出せなかった。そこで私は、「陶芸」のそのような表面的構造から逃れようと、表面を細かく削り、複雑な奥行きを出す独自の技法を考案した。しかしながら、それは同時に、「陶芸」との対比の関係から生まれた、やきものに寄り添い、依存した表現だったのである。自らの作品の中にそのような矛盾があると気付き、認めたとき、そこに新しい世界が現れたように思えたのだ。

「工芸」は元来、あらゆる二項の中間に立つ、複合的な発想をとる。美術と生活、美術と工業、機能と装飾、あるいは伝統と近代という、対立する二項を統合することなく、別々のままを保ちながら、結びつけ、複合るのである。私の目指す思考は、このように、どちらを抑え付けることも、どちらに従属することもなく、確固とした意思を持って、新たな領域を模索するものである。部分への意識を持ち、表面性へと言及する私の作品は「工芸」でもあるが、実在を求める姿勢は「彫刻」的とも言えるだろう。私は工芸的なしなやかさを持って、新たな領野に立ちたいと願うのである。

自らの立場を明確にすることを求められる社会の中では、どこにも収まらない、このような姿勢は一見曖昧で、批判の対象となりうるかもしれない。対立する二つの観念は調和することなく、一つが正ならば、これに反するもう一つは必ず邪とされてしまうだろう。しかし、二元的事実は互いに違反する事実ではなく、相対依属の関係なのである。美と醜、光と闇、生と死、喜びと悲しみ…これらの対



時に、残月、光冷ややかに  
The moonlight is cool at dawn  
陶  
Ceramic  
62 × 44 × 55 cm

比の間に深い相関関係があるので、自然そのものだからだ。二元的な分別は思考の体系として必要とされただけであって、本来、その二つを分かつ事は不可能である。これは現実空間に表象化する事はない。だが、芸術ならば二元論の抱える矛盾を越えることができるのではないだろうか。

私はこれまで、広い空間を占有し、支配するものが力のある作品だと考えていた。けれど、それは日常世界の、水平的な時間の流れの中での空間でしかなかった。それが次第に、作品の中心へ、無限に広がる可能性を持った空間をつくろうとするようになったのである。それは、垂直的な時間の中で深まる空間である。垂直的瞬間は、反対命題を逆転させ、矛盾しあう事象を重ねて、水平的時間の中に囚われている二元性を解放する。

『時に、残月、光冷ややかに』は、仮面の観念をモチーフとした作品である。仮面の陰に身を潜め、今ある自分の姿を隠すのは、殻を閉ざした状態であるが、仮面を被ることは、今とは違う新しい未来を得ようとする、積極的な意志だ。隠蔽と仮装の総合である仮面は、隠すと同時に現す、という矛盾する奇妙な言い表ししかできないのである。

では一体何の仮面であるのか。それは虎である。ここで私は、中島敦の「山月記」を引用したい。詩人へとなり得なかつた男が虎になってしまった、この物語の中で、男・李徵はその悲劇的な運命の原因を告白する。「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という猛獸を飼いふとらせた結果ではないかと言うのである。こうした二律背反を抱えた虎は、仮面としてふさわしいように思われた。

陶で大きなボリュームを見せようとすると、手捻りができる薄い壁で、つくろうと思う形体の外側のラインだけを追い、中に生まれる空洞は隠すことになる。そこで、自身の作品が「陶芸」であって「陶芸」でない、という矛盾に気がついたとき、動物の身体を切り取り、今まで隠していた、必然的に生まれる表と裏、外と内、壁の厚みを見せようと試みた。作品が表面的な構造を持っていることを示すことが、矛盾を解放させることだったのである。まさに表裏が一体となって形が立ち上がって来る、やきものの構造は、対比が両立していることのアリティを、私に実感として与えた。

表と裏をもつ、仮面の構造は、やきものと直接的に繋がる。私は更に、いくつもの対比を重ね、その対比を仮面という形体の中で調和させようとした。仮面と素顔、隠蔽と仮装、自己と他者、動物と人間、昼と夜、あるいは光と影、陰と陽…一瞬の時間の中に、相反する事象は垂直に重なり、私はそこに作品の豊かさを見出すのである。

私には二元を完全に拭い去ってしまうことはできない。しかし、対比のどちらをも否定せずに認める思考は、二元的思考から生じる、あらゆる苦悩を消し去るに違いない。二元から逃れられない世界にいるからこそ、私は二元の孕む矛盾を受け入れるのだ。そして、作品の中で対比を両立させ、その矛盾を矛盾であることから解放するのである。